

『たけくらべ』解釈への疑問

末 利 光

樋口一葉（一八七二～一八九六）の代表作『たけくらべ』は、明治二十八年一月から翌年一月までの一年間『文学界』に連載されたものである。

一葉の遺した短編小説二十一編のうち、『大つごもり』（明治二十七年十二月発表）『にぎりえ』『十三夜』『わかれ道』（『国民之友』明治二十九年一月）そして『たけくらべ』の傑作五編は、いずれも明治二十七年十二月から二十九年一月までに完成している。この期間を一葉研究家たちは“奇跡の十四ヶ月”などと呼んで称賛していることはご承知の通りである。一葉はこれらの作品を世に問うと、明治二十九年の十一月に他界している。二十四才だった。

樋口一葉の作品に共通して流れているものは、今日の男女同権の社会とはほど遠い、女性差別の中に生きた女の悲しさである。わけても吉原遊廓のある下谷区龍泉寺町での一年ほどの生活は、女の悲しさの極限を見る思いだったに違いない。一葉はここで、おもちゃと駄菓子を商う小店を開いて自分自身の病弱を支えながら、貧困とたたかった。『たけくらべ』に登場する“筆や”はこの小店であるし、一葉自身は“筆やの妻”という形で登場してくる。

ところで私が『たけくらべ』解釈への疑問」というテーマで一文をまとめようとしている理由は、

- 一、『たけくらべ』と『にぎりえ』は一つのテーマから発想している姉妹編であること
- 二、女の悲しさをテーマに書き続けた一葉文学の頂点をなす『たけくらべ』の解釈の最も重要な部分で、これまでの

研究者たちの解釈に重大な誤解がある

という二点を指摘したいと考えたからである。加えて、文体と標準語（現代では共通語という）の原点のように思われている一葉の作品に、実はかなりの「甲州弁」（山梨県地方の方言）が含まれていることを示したいと考えたからである。

一点目の理由に入る前に、『たけくらべ』と『にぎりえ』の短編小説の概様を紹介したい。

まず『たけくらべ』の主人公は大黒屋に預けられている禿かむろの美登利である。その美登利と龍華寺の信如との淡い恋物語である。美登利が信如の気を引くような行動をとればとるほど、信如は知らぬ行動をする。仲間の子どもたちも本当に信如と美登利とは表に現れた通りの仲だと思いついでいる。一方、女金貸しの孫の正太郎は美登利が好きでたまらない。大黒屋の家の中まで平気で上がり込んで行けるほどの親しさだ。祭りがあり、喧嘩があり、子ども世界の勢力争いがあった、子どもたちは成長して行く。そして遂に大人になった美登利は華魁に、信如は僧になるために土地を離れてそれぞれの人生を歩み出して行く。名も告げずに大黒屋の門に投げ込まれた水仙の作り花を、美登利はそれと察して一輪ざしに入れ、淋しく眺めるところで終わっている。新吉原という場所に、プラトニックに咲いた恋である。

さて一方、『にぎりえ』であるが、こちらは手管手練の限りを尽して男から金を巻き上げずにはおかない女たちが登場する。

丸山福山町の「菊の井」のお力りきもその一人。客の結城朝之助とものすけ（一葉の文学の師であり、経済的な協力者でもあったとされる半井桃水なからいとうすいがモデルとされる）という男を愛しながら、一方で自分に狂ってしまい、店をたたみ、妻子までを捨てた源七が気がかりである。呼び出した源七と結局は無理心中。毒婦のように他人には思われながら、毒婦になり切れなかった女の物語りである。

ところで、文学を音声表現に代えることを仕事としている朗読家の私の読書法は、一般の読書法とはいささか違っている。それは一字一句でも意味が理解できないうちは、考えて考えて考えぬくのである。意味不明であれば自信のなさが声に表われるし、一つの語の内容によっては、それが前のことばと一つにして読むのか、後につながるのか。あるいは

は「馬鹿」と文字では示してあっても、本当に「お前は馬鹿だぞ」と叱る場合と、若い女性が恋人に向って鼻に響かせながら、「ばかぁーん」というのとはまるで違う。アクセントも違えば、プロミネンス（強調）の仕方も違う音声表現ほど、逃げ隠れや誤魔化しのきかないものはないのである。

それともう一つ。朗読を始める前に、作品全体（文章全体）の中の山場、つまりへそはどこにあるか。そして作品を貫いて流れるリズムは何かということを考えるのである。どんな短い作品でも、逆に長編の小説でも手法は同じである。作品の中に流れている感情のリズムを探し出し、そのリズムに耳を傾けながらへそに向って読み進むのである。そうすれば、作品のイメージが間違いなく聴き手に伝わるからである。「末利光著『ことばのおへそ』（三省堂選書88）参照」さて、本題に話を戻そう。

『たけくらべ』の中のへそ、作品の山場は何んといっても（十三）章の、美登利と信如の出会いであろう。田町の姉のもとに使いに出かける信如が、大黒屋の門の前で下駄の鼻緒を切って仕舞う。それとは知らぬ美登利は他人の難儀を救おうと飛び出して行く。そして思いもかけぬ信如と出会ってしまうのである。しかし今さら美登利も信如も引き返せない。美登利の胸の動悸は早くうち、信如も冷汗を流すが、それでも互に口が利けない。美登利の

「胸はわくわく上気して、どうしても明けられぬ門の際にさりとも見過ごしがたき難儀をさまざまの思案尽くして、格子の間より手に持つ裂れを物いわず投げ出せば、見ぬように見て知らず顔を信如のつくるに、ええいつもの通りの心根と遣る瀬なき思いを眼に集めて、少し涕の恨み顔、何を憎んでそのように無情そぶりは見せらるる、言いたい事はこなたにあるを、余りな人とこみ上ぐるほどの思いに迫れど、母親の呼声しばしばなるを佻しく、詮方なさに一ト足二タ足ええ何ぞいの未練くさい、思わく恥ずかすと身をかえして、かたかたと飛石を伝いゆくに、信如は今ぞ淋しう見かえれば紅入り友仙の雨にぬれて紅葉の形のうるわしきがわが足ちかく散りぼいたる、そぞろに床しき思いはあれども、手に取りあぐる事をもせず空しう眺めて憂き思いあり。」

ここがへ、そであらう。相馬御風はこの下りの文体の美しさを絶賛している。

ところで、このへ、そにともなう作品全体を流れるリズムはといえば、正太郎がいつも口ずさんでいる流行ぶしである。(十四)章の中にこういう描写がある。

正太郎が美登利を探していると、仲間の子どもの一人から、今日は嶋田に結いかえて揚屋町のはね橋から廊の中へ入っていったという情報が伝えられた。正太郎は美登利がいよいよ華魁おいらんになるのを察すると、

「十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ、と怪しきふるえ声にこの頃この流行ぶしを言っ、今では勤めが身にしみ」と口の内にくり返し、例の雪駄せったの音たかく浮きたつ人の中に交じりて小さき身体は忽ち隠れつ」

と、その時代の流行ぶしを小声でくり返し歌っている。

これが『たけくらべ』全編を貫くりズムになることは直感していたが、それがどんな内容で、どんな節まわしで歌われたのかを調べなければこの作品は朗読できないと感じた。だが、この歌は私の耳の奥にかすかに残っているような気がした。多分は死んだ父が歌っていたのか。東京の下町の商家であった私の家には多くの使用人がいた。地方から出てきたその人たちの遊びに行く先は、たいてい決まっていた。浅草かその先の新吉原である。だからこの人たちが幼い少年の私に面白半分おもしろ半分に教えたのかも知れなかった。ことに出だしの「十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ」の文句ははっきりと覚えていた。その後友人の力も借りて遂に突き当てることができた。意外にもこの唄は『厄介節』という名が付いている。その全文をご紹介します。

「わたしや父ととさん母かかさんに、十六七になるまでも、蝶よ花よと育てられ、それが曲輪くるわに身を売られ、月に三度の御規則そくで、検査けんさなされる其時そのときは、八千八声やえのほととぎす、血ちを吐はくよりもまだ辛い、今では勤めも馴なれまして、金かねあるお方に使つかわする、手管てくだて手れんの数々は、恥はかしながら床とこの中、足はちりちり藤ふじの蔓つる、さうすりやお客のりもお惣のうけ気で、一度来るとこ二度も来る、二度来るところは三度来る、朝来あさきて昼来ひるて晩ばんに来て、さうして親方おやかたしくじって、つかひ果はして止とめの客、空虚からの財布さいふを頸くびに掛け、破片かけたお椀わんを手てに持って、剩食物おあまりや無いかと門かどに立つ、その時ときや知しっても知らぬ振り、それが

女郎衆じよろしゅのならひなら、つらくも高見たかみで見物けんぶつだ、厄介やくかいぢや、厄介やくかいぢや。

(藤沢衛彦著『明治流行歌史』)

止めの客とは、金を使い果たしてもう廓に入れてもらえない者を指すのであろう。

この唄は何時ともなくうたわれてきた「ぞめき唄(騒ぎ唄のこと)」で、廓の地廻り連中に持てはやされたという。特別のふしがあったというのではないらしいから、この唄を心の音として朗読することになる。

さて、『厄介節』の文句はこの種の唄の常として多少の相違はあるにせよ、大体似かよっている。そして『たけくらべ』と『にぎりえ』を並べてみると、

「わたしや父ととさん母かかさんに、十六七になるまでも、蝶よ花よと育てられ、それが曲輪まがらみに身を売られ

までの冒頭の部分を物語りにしたのが『たけくらべ』であり、それがやがて「手管手れん」を使って金をすっかり巻き上げてしまい、家族も家業もつぶさしてしまうほどの女郎に成長して行くのが『にぎりえ』のモチーフである。「菊の井」のお力は正にそうした女郎であり、お力りきに入れ揚げて門かどに立ったのは源七である。しかし一葉の筆は『厄介節』の通りにはさせず、零落した源七に「知らぬ振り」も「高見で見物」もできず、そのために心中しなければならなくなった女を描いている。従って『たけくらべ』と『にぎりえ』は、当時広く人口に膾炙された『厄介節』から生まれた双子の姉妹と見るべきであろう。作家としての一葉の心に『厄介節』の旋律、リズムが二つの作品を同時に発想させたに違いない。事実、この二つの作品に流れる感情のリズムは同一のものと受け取らざるを得ないからだ。

ところで樋口一葉研究の書籍は数多いが、その中でも岡良治著『樋口一葉・考証と試論』には、「『たけくらべ』の()編末の美登利の、それまでとは打って変わった暗い、虚無的な心境は、『にぎりえ』のお力りきの心境とも相通じるところがあり、これも結局は一葉自身の内面に巢食くさっていた暗さだったと思われる」

と記されている。

『たけくらべ』の美登利と『にぎりえ』のお力の心境に相通ずるものがあるという岡良治氏の指適に私も賛成であるが、これが「一葉自身の内面に巢食っていた暗さだった」と即座に決めつけるのはいかがなものだろう。私自身、一葉が決して明るい性格であったとは思わない。しかし、この場合、美登利とお力に共通する感情は、何度も繰り返しているように、『厄介節』の感情であって、一葉の暗さに直接起因するものではないと考えられる。

さらに『厄介節』（曲節なし素見唄・明治三十七年頃より流行）と題する別の唄もご紹介してみよう。

「わたしがお父さん母さんは、幼い時分に世を去られ、それから他人に育てられ、七歳の時から了髪になり、十四の春から店に出て、赤襟赤熊の仇気なく、赤い仕掛着で店を張り、お客の登樓を待つけれど、上から下まで玉揃ひ、お客の迷子も無理ぢやない、ぞめきの客か素見の、時稀にはお客もあるけれど、わたしの頼みにやなりやしない、早く女郎を廃業し、堅気の丸鬻に繻子の帯、眉尾落して主の側、春は上野や向島、帰りの奢りは八百松で、互に手を取り手を引かれ、鴛気取で折詰を下げ、その儘廓内へ廻り込み、格子に寄って見世の、明輩女郎衆に羨ます、もしも添い遂げられぬなら、末は二人で心中か、厄介ぢや、厄介ぢや。

こちらの『厄介節』は、両親を失くした少女が七歳まで育てられたはいいが、花街に売られて小間使のような仕事から始まって、十四歳の春から客をとらされるようになったというから、『たけくらべ』の美登利のように、いろいろと仕込んで貰ってから花魁になって行くのとは違って、極く一般の女郎への道程なのだろう。それにしても、早くいい旦那を見付けて堅気になり、昔の仲間や女郎たちに見せびらかしにやってきたいというのだから緩かではない。

何れにしても『たけくらべ』と『にぎりえ』は、当時、大いに流行した『厄介節』から一葉が発想した姉妹編と見るのが素直であろう。

次に、第二点の、一葉文学の頂点をなす『たけくらべ』の解釈で、これまでの研究家たちの解釈に重大な誤解がある

という理由である。

『たけくらべ』の概様はすでに述べた通りである。子どもの世界を卒業して大人になるということは、主人公の美登利にとつては華魁になるということ。また信如にとつては出家して行くことである。本当の親でもない大黒屋の楼主が、どうしてもいままで栄耀栄華を尽くさせてくれたのか、幼い美登利には知るよしもなかった。ところが、ひとつの出来事によつて美登利ははっきりと悟る。その出来事こそが重大なのだ。

ここでは『たけくらべ』の最終章の直前（十五）章をそのまま掲載してみよう。

（十五）

憂く恥ずかしく、つつましき事身にあれば、人の褒めるは潮りと聞きなされて、嶋田の鬚のなつかしさに振りかえり見る人たちをば我れを蔑む眼つきと察られて、正太さん私は自宅へ帰るよと言うに、何故今日は遊ばないのだろう、お前何か小言を言われたのか、大巻さんと喧嘩でもしたのではないか、と子供らしい事を問われて答へは何と顔の赤むばかり、連れ立ちて団子屋の前を過ぎるに頓馬は店より声をかけてお仲がよろしうございますと仰山な言葉を聞くより美登利は泣きたいような顔つきして、正太さん一処に来てはいやだよと、置きざりに一人足を早めぬ。

お酉さまへ諸共にといいしを道引き違えて我が家の方へと美登利の急ぐに、お前一処には来てくれないのか。何故そっちへ帰って仕舞う、余りだぜと例の如く甘えてかかるを振り切るように物言わず行けば、何の故とも知らねども正太は呆れて追いつき袖を止どめては怪しがるに、美登利顔のみ打ち赤めて、何でもないと、と言う声理由あり。

寮の門をばくぐり入るに正太かねても遊びに来馴れてさのみ遠慮の家にもあらねば、跡より続いて縁先からそつと上がるを、母親見るより、お正太さんよく来て下さった、今朝から美登利の機嫌が悪くて皆なあぐねて困っています。遊んでやって下されと言うに、正太は大人らしい惶りて加減が悪いのですかと真面目に問うを、いいえ、と母親怪しき笑顔を少し経てば愈りましょう、いつでも極りの我がままさん、さぞお友達とも喧嘩しましょうな、真実やり切れぬ嬢さまではあるとて見かえるに、美登利はいつか小座敷に蒲団抱巻持ち出でて、帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ

伏し臥して物をも言わず。

正太は恐る恐る枕もとへ寄って、美登利さんどうしたの病気なのか心持が悪いのか全体何うしたの、とさのみは摺り寄らず膝に手を置いて心ばかりを悩ますに、美登利は更に答えもなく押さゆる袖にしのび音の涕、まだ結いこめぬ前髪の毛の濡れて見ゆるも子細ありとはしるけれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出でずただひたすらに困り入るばかり、全体何がどうしたのだろう、己れはお前に怒られる事はしもしないのに、何がそんなに腹が立つの、と覗き込んで途方にくるれば、美登利は眼を拭うて正太さん私は怒っているではありません。

それならどうしてと問われれば憂き事さまざまこれはどうでも話のほかの包ましさなれば、誰に打ち明けいう筋ならず、物言わずして自と頬の赤うなり、さして何んとは言われねども次第次第に心細き思い、すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし思いをもうけて物の恥ずかしさ言うばかりなく、成事ならば薄暗き部屋のうちに誰とて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人気ままの朝夕を経たや。さらばこのようの憂き事ありとも人目つましからずばかりく迄物は思うまじ、いつまでも人形と紙雛さまとをあい手にして飯事ばかりしていたらばさぞかし嬉しき事ならんを、ええいやいや、大人になるはいやな事、何故このように年をば取る、もう七月十月、一年も以前へ帰りたいたいと老人じみた考えをして、正太のここにあるをも思われず、物いいかければ悉く蹴ちらして、帰っておくれ正太さん、後生だから帰っておくれ、お前がいると私は死んで仕舞うであろう、物を言われると頭痛がする、口を利くと目がまわる、誰も誰も私の処へ来てはいやなれば、お前もどうぞ帰ってと例に似合わぬ愛想づかし、正太は何故とも得ぞ解きがたく、烟のうちにあるようにしてお前は どうしても変てこだよ、そんな事を言う筈はないに、おかしい人だね、とこれはいささか口惜しき思いに、落ちついて言いながら目には気弱の涙のうかぶを、何とてそれに心を置くべき、帰っておくれ、帰っておくれ、いつまでここにいてくれればもうお友達でも何でもない、いやな正太さんだと憎らしげに言われて、それならば帰るよ、お邪魔さまでございましてとて、風呂場に加減見る母親には挨拶もせず、ふいと立って正太は庭先よりかけ出だしぬ。

いつも美登利の供のように付き従っている正太郎さえも遠ざけて、なぜ美登利が唐突にあばれ出したのか。これは重大である。『すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし思いをもうけて物の恥ずかしさ言うばかりなく』とあるが、美登利の身に昨日、一体何が起こったのか。ここが分からなければ、『たけくらべ』の理解は難しいし、朗読もままならない。ここで登場するのは、ほとんど全てが初潮説である。

「美登利が初潮を見、ういういしい大島田に髪を結われ（それは美登利自身ははつきり知らないにしても、近く娼妓として店に出される、その予告編なのだ）、思い悩んでいるのを心配した正太郎が『加減が悪いのですか』と尋ねたのに対して（美登利の母親は）怪しい笑顔で『少し経てば癒りませう、いつでも極りの我まゝ様、嘸お友達と喧嘩しませうな、真実やり切れぬ嬢さまではある』と答え、その後すっかり美登利が沈み込んでしまったのを、『病ひの故か』と人が心配したおりに、けろりとして、『今にお侠の本性は現はれます、これは中休み』とわけありげに言うような母親なのである。（中略）それはともかく、一葉は、美登利の信如への慕情には、自身の渋谷へのそれを、また初潮を見た美登利の心の乱れの表現には（源氏物語の紫上の新枕の描写を下敷きにしてはいるが）、やはり自身の若き日の体験を移し用いた」

と、関 良治著『樋口一葉、考証と試論』に記されている。

また和田芳恵著『近代文学鑑賞講座』（角川書店）には

「少女の生理的な変化や微妙な感情が、あざやかに書かれている。読者は、正太郎がどうしてわからないのだろうと思いつつながら自分の置きわすれていた子供の頃を思い出すのである。ここには、一葉が女であったという強みがことに感じられる」

と述べている。

そこで私の考えであるが、女性ならば誰でもが体験する初潮で、なぜこんなに美登利があばれるのだろうかという疑問である。因みにその荒みぶりを観察してみるために棒線を引き出したのが、前掲の『たけくらべ』（十五）の側線である。その中でも殊に疑問なのは

(一) 憂き事さまざまこれはどうでも話のほかの包ましさなれば、誰に打ち明けいう筋ならず
 (二) すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし思いをもうけて物の恥ずかしさ言うばかりなく
 (三) さらにこのよ様の憂き事ありとも人目つつましましからずばかく迄物は思うまじ
 の三点が浮かぶ。このところを『樋口一葉著・たけくらべ』(明治図書中学生文庫17・昭和46年刊)によって現代文にして紹介してもらうならば、

(一) つらく悲しいことがいろいろあって、この理由はどんなことがあっても話すことのできない恥ずかしいことなので、だれにもうち明けて言えるような筋のものではない。

(二) すべてきのうまでの美登利にはまったくなかった初めての感情が出てきて、その恥ずかしさはことばでは言えないほどで、

(三) そうすればこのようになりたいことがあっても、人目も恥じずにすむから、これほどまでも思いはしないだろうと、明快に説明してくれている。誰が現代語に訳してみてもこの通りのものとなるろう。

そこで「月経説」をとるならば、美登利ほどのおませな女の子がこれほどまでにうろたえる筈がない。男ばかりか女の子の仲間も沢山従えている美登利ならば女の子同士の話があるはずである。誰にでもある女性の月経が、女の子の間を含めて誰にも打ち明けて言えない恥しいことなのか。いかに封建的な気風ののこる当時だとしても月経を罪悪視した覚えはないだろう。月経を見た恥しさはことばでは言えないほどだろうか。月経を見たことで暗い部屋にひき籠ってまで、もの思いをしただろうか。全ては大袈裟すぎて、叫びすぎだと考えざるを得ない。

はっきり言って美登利はこの時に、大黒屋と母親との了解の元で、初めて男を知ったのである。男を知るといふよりも、その世界でいうところの水揚を済まされたのである。無論それは美登利でさえ、この上ない恐しい体験だったのである。美登利の頭に描いていた姉の大巻の姿でさえ、表に現われた権勢と栄華の姿だけであって、その裏側を知らなかったのである。その背景を識ったからこそ美登利があばれ出したのである。この種の職業の女の悲しさである。

林えり子著『おこんさん』（三田文学刊）の主人公は、私の知人の宮ふじさんである。新内芸者としての第一人者であるが、師匠岡本文弥の手掛けた左翼新内の「西部戦線異常なし」の新曲をはじめ、「お吉人情本」「藤十郎の恋」、樋口一葉の「十三夜」までも聞かせてくれる。『おこんさん』とは宮ふじさんの昔の愛称のひとつで、七十才を越えた今も若々しく、細身の体に三味線を引き寄せて、しゃんとした姿勢で唄い出す。場所も吉原の「鳥幸」という小料理屋とあれば、吉原の昔が再現されたような気持ちになった。その宮ふじ姉さんの一代記『おこんさん』によれば、

「いまはともかく、昔は芸者が半玉から一人前になるには水揚げを経なくてはならず、それには大層な出費がかさむことで、並の男には出来ないことであった。売り物の体に万が一のことがあってはその配慮から、性技に手慣れた、性欲の荒々しくない年配者が置屋によって選ばれた。そういう男に処女を奪われる屈辱は、金での取引きという思いも絡まって、これが商売と割切っても、心のひだに刻み込まれないとは言えないのであった。うっとりと思いつくには、あまりに酷い一夜である。はつ（宮ふじ姉さんのこと）は、朋輩の誰かが初夜を語るのを、いまだに一度も耳にしたことがない。（中略）水揚げの客を忌み嫌うようにその客がいる座敷には決して出ないという芸者に較べれば、はつは己の幸運を思わずにはいらなかった」

と記されている。

芸者と華魁とは違うといっても、華魁のお披露目はそれ以上に派手だろう。派手にお披露目をして売れっ子の華魁になるためには金持ちのスポンサーが選ばれる。選ばれた方に見ればそれが傲慢にもなったろうが、女性に見れば、それも年端も行かぬ娘には、どんなに屈辱であったことだろう。

一葉はその現実を下谷竜泉寺したやでの生活の中で知ったのである。文学の師である半井桃水なからいとうすいもまた東京朝日新聞小説記者である。ドキュメントとして文章を書くことが、頭の中で作り上げて書く小説よりも遙かに迫力があることを教えない筈はない。それにしてもそのものずばりを書いては文学にまでは高められない。かと言って黙って通り過ぎるには問題

が大きすぎた。しかも今とは全く違う封建社会の日本である。樋口一葉はそのぎりぎり結着のところで『たけくらべ』をまとめたと解釈すべきであろう。そこを読み取らなければ、名作『たけくらべ』は名作の価値を失ない、誠に美しいプラトニックな子どもの恋として終ってしまうだろう。

『たけくらべ』最終章の一部は、まるで水揚げのあったことを認めて駄目押ししているような文章である。

「美登利はかの日を始めにして生まれかわりしようの身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通え、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘いに行けば今に今にと空約束はてしなく、さしにも仲よしなりけれど正太とさえに親しまず、いつも恥ずかし気に顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活発さは再び見るに難しくなりける、人は怪しがりて病の故かと危ぶむもあれども母親一人ほほ笑みては、今にお俠きやくの本性は現われます、これは中休みと子細こほありげに言われて、知らぬ者には何の事とも思われず、女らしう温順おとなしうなったと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹そしるもあり」

初潮が折角の面白い子を種なしにしてしまつて、誹そしる人が出てきたなど誰が考えても話の辻褄が合わないだろう。

先程の明治図書中学生文庫によれば、

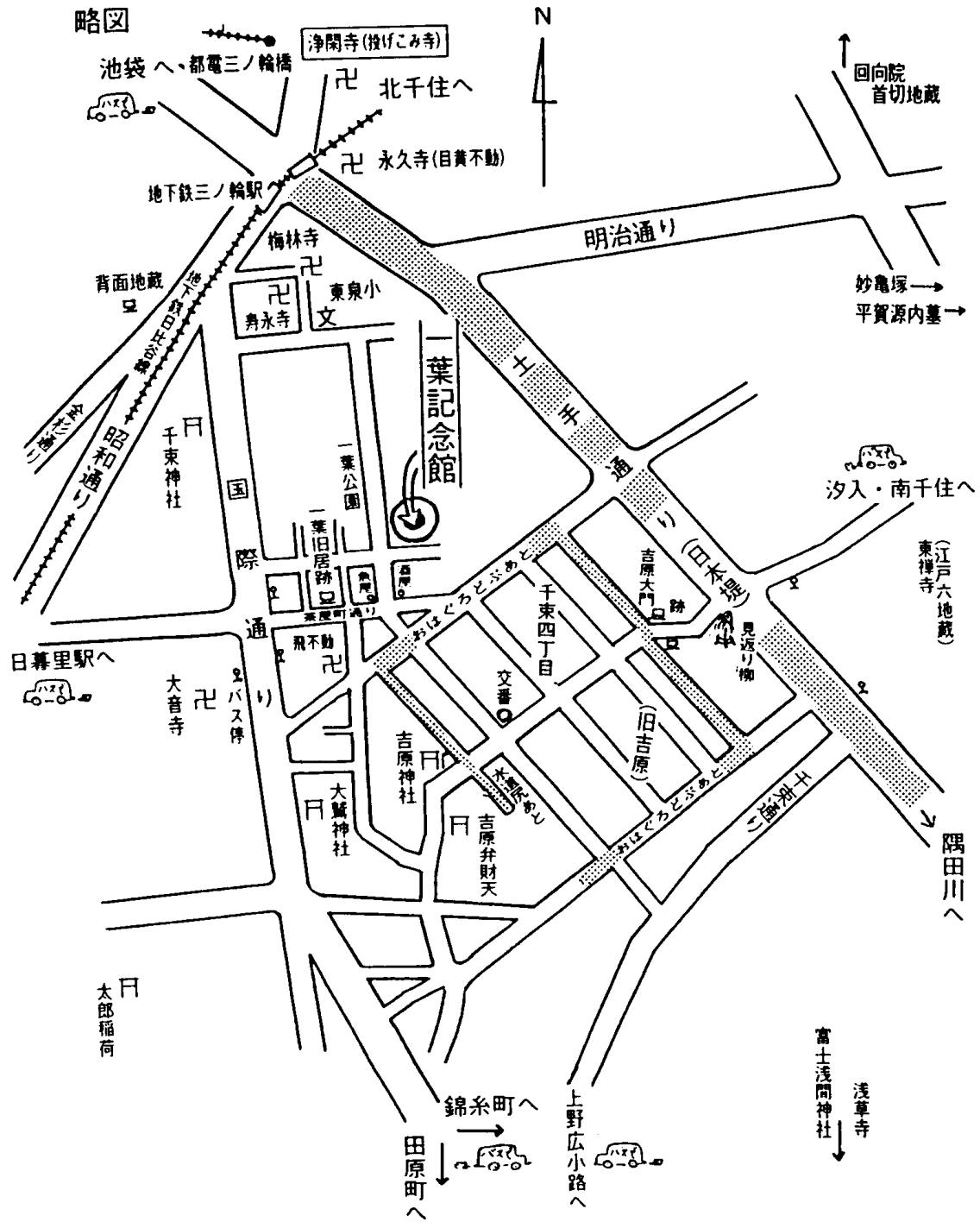
「女らしくしとやかになつた。」とほめる人もあれば、「せつかくのおもしろい娘をだいなしにしてしまつた。」と悪く言う者もあると、元の文章に忠実に書き下している。何も知らない初心うぶな子を台無しにしてしまつたと明確に述べているのである。

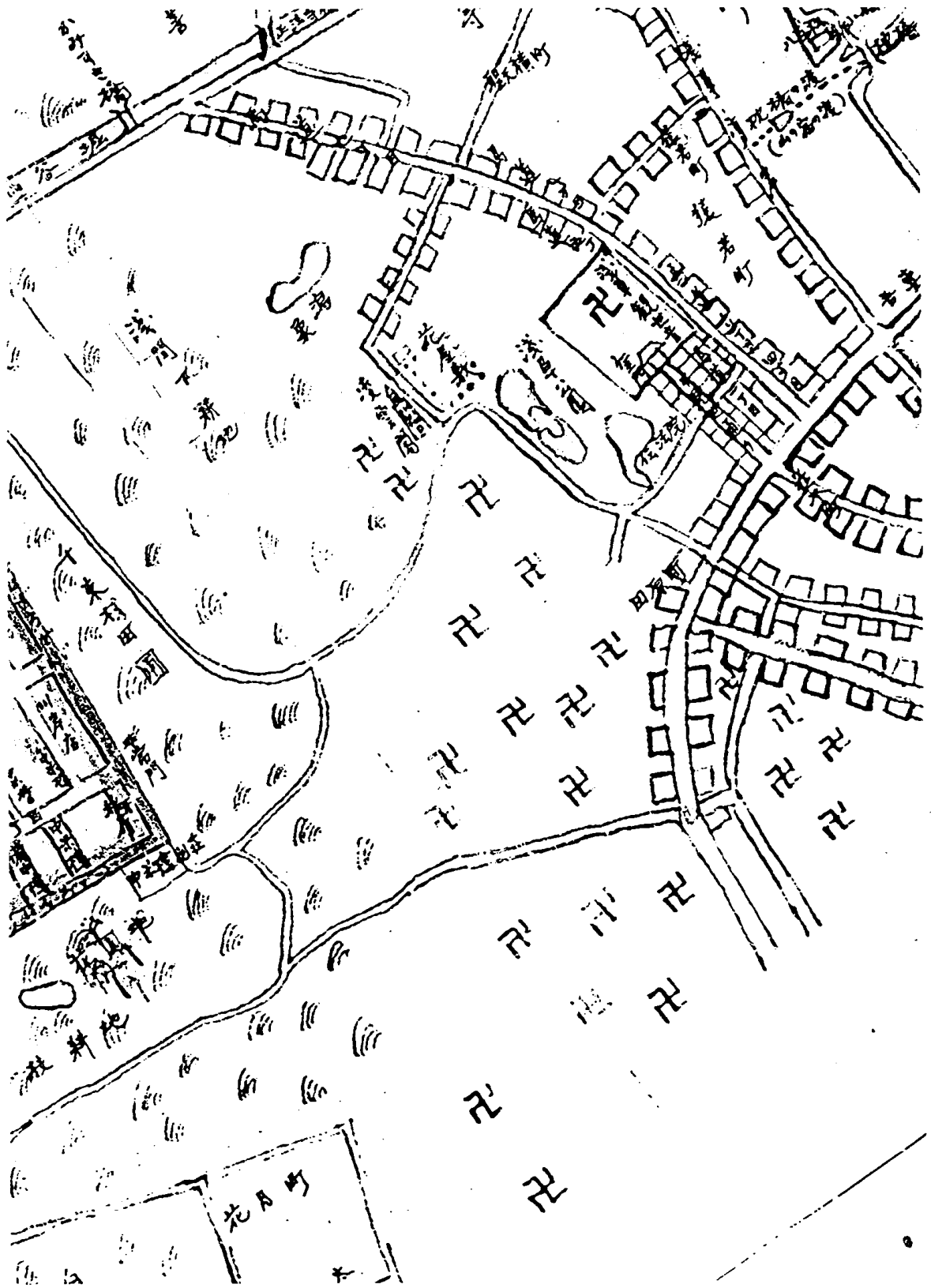
それでも初潮として来たこれまでの『たけくらべ』解釈は、ほぼ次のような理由からと想像される。

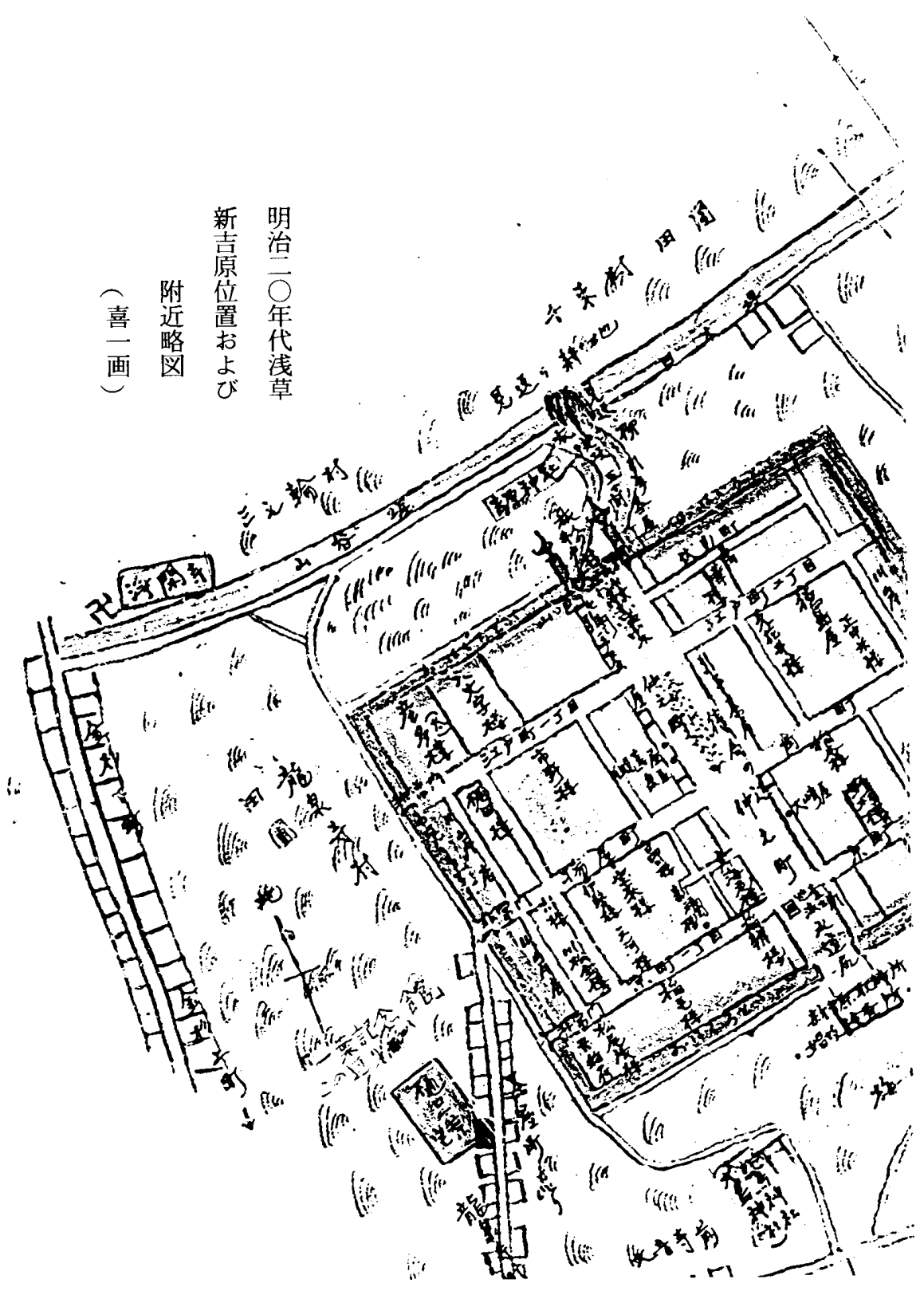
- 一、教育的な立場からわざと初潮ということと解釈した
- 二、封建的な日本社会の中で、その恥部をあからさまにすることが出来なかつた
- 三、まるで思い当たらなかつた

『たけくらべ』解釈への疑問

一葉記念館 周辺案内図より







明治二〇年代浅草
新吉原位置および

附近略図
(喜一画)

と区分してみれば、(一)(二)の理由が大きかったのは当然だと考えられる。

そこで問題なのは「初潮説」を「水揚説」に代えることによって、これまでの一葉文学がどう変わってくるか。どう見直されなければならないかという問題である。私はそれを極めて簡単に割り切って考えるのだ。つまり、一葉の『たけくらべ』と『にぎりえ』の姉妹編を『厄介節』から出発した記録文学 documentary literature としてとらえればよいということだ。記録文学としてとらえると、無理なく全てが割り切れる。一見、穏やかな青春の恋愛小説風にみえる『たけくらべ』にこれだけの現実がある。まして『にぎりえ』は記録文学に限りなく近い小説と考えることができよう。

ところで、記録文学という以上、その下敷きとなった事実がなくてはならない。そのものずばりではなくとも、この事件が話の骨格になったはずだというものが欲しい。

そこである一日、地元に住む友人の案内を借りて新吉原の界限を訪ねることにした。台東区立一葉記念館からいただいた現代の周辺案内図に『明治二十年代浅草新吉原位置および附近略図』(喜一画とある)という手描きの地図と比較してみると、往事の新吉原が明確に浮かんでくる。

千束四丁目がいわゆる吉原の界限であるが、いまは「おはぐるどぶ」は勿論のこと「山谷堀」さえも「土手通り」と名を変えて、コンクリートに舗装された道路となり車が激しく行き来している。かつての廓内は今でも特殊浴場などのビルが建ち並び、黒づくめの服装をした男たちが客引きをしている。時代は変わっても人間の本质は変わらないのだろうか。

往時のこの辺りの風景は永井荷風の筆を借りるのが一番だろう。山谷堀の堤に立って、

「堤の両側は頗る美しき田園の光景を、行く人の眼の前に廣げるであろう。右手は見渡す限りの水田^{みずた}を隔て、小塚原や千住の青樓が、高く低く屋根を並べて居る。此の一團の人家を越えては、所^{しよしょ}所に樹や竹藪の茂りが青々と望まれ、そして其の又、彼方には、若し天氣が透き通る様であったなら、隅田の上流を行く白い帆影が、幽かに其れとなく認められる。無論紫の筑波山^{つくばやま}さへもが雲から見出されるのである。(中略)此處から、思ふともなく後を振返ったなら、吉原遊

廓は、木の葉から、一面に廣い數知れぬ屋根丈を現はして居る。角海老樓の時計臺や彦太、品川の取分けて高い建物の魏然として聳えて居る有様は、どうしても大きな城としか思へない。足を早めて、もう一二町も行くと、堤は程なく盡き様として、一構の寺が位置どられてあつた。

此の寺こそ、薄命の娼婦が骨の朽ぬべき處であるのだ」

永井荷風の筆を追っているうちに、私は目指す投げ込み寺、浄閑寺に着いてしまった。荷風が初めてこの寺を訪れたのは明治三十一、二年の頃というから、一葉没後二年ほどの後で、ほぼ一葉の見た風景と同じとみてよからう。これが『たけくらべ』や『にぎりえ』の生まれた周辺の景色である。荷風に浄閑寺の当時の様子をさらに説明してもらおう。

「何たる、淋しい、物怖しい有様なるよ。来る人は忽ち陰惨の氣に打れて、已に冷たい穴の中に這入った様な心持ちがする。昨日まで、緑の黒髪を黄金に飾り、雪なす肌を錦の襦袢にまとはせた、花とも蝶とも見るべき遊女の骨は、實に、此の陰氣な淋しい處に横はって居るのであつた。

見よ。二本ほど、大きな榎を後にして、此處に、魏然と高く石垣を築き上げた、其の上に、一個の石柱がある。新吉原無縁墓此の六字が彫り付けられてあるばかり。其の周囲には幾何の雑草の生へて居るのも見た」

荷風が眺めた浄閑寺の印象と、実は現代の様子とにそれほど変わりのない、いや荷風からいえば大きく様変わりしたのかもしれないが、私が本堂の裏に廻つての感じは少しも変わらない気がした。とにかく土の中から遊女たちの手にゆつと出てきて、引っ張り込まれそうな錯覚を感じる。

「遠い國からは、引取手が来ないと云ふ、捨てるにも捨てられない死骸が、かくして、夜の引明けに、青樓の非常口から、そっと、擔ぎ出されて、此處に骨と變はらせられて了うのだと云ふ事である。

何れにしても、悲惨極まり無きは、青樓の娼婦が其の身の果てである。恁る點から見たなら、實に遊廓ほど、悲しく

も又怖ろしいものは無いのだ」(荷風全集・第二十八卷・『夜の女界』・岩波書店)

振袖火事のと、日本橋葎町から浅草田圃に代替地を貰って「新吉原」いわゆる吉原遊廓が始まったのが一六五七(明暦二)年のことである。この大火で江戸の区画整理が一举に進み、全国から建設労働者がどっと雪崩れ込んで来た。加えて参勤交代でやってくる、江戸詰の家臣たちも単身赴任であってみれば、江戸の街は圧倒的に男の数が増えて風紀が乱れてきた。そこで幕府は吉原を保護して江戸の治安を維持しようとする。こうした国家的援助の元に新吉原は栄え続け、一九五八(昭和三十三年)の「売春防止法」の成立を待って終るのである。この三〇一年間の吉原遊廓史の中で、浄閑寺に投げ込まれた遊女の数なんと二万五千人(『浄閑寺と荷風先生』浄閑寺刊)というのだから、

$$25,000 \div 301 = 83.056 \text{ 人}$$

それを十二ヶ月で割ると

$$83.056 \div 12 = 6.921 \text{ 人}$$

で、毎月平均約七人の遊女が投げ込まれたという計算になる。まるで遊女のゴミ捨て場である。まさに日本一の「投げ込み寺」であろう。

そんな気持ちで浄閑寺をもう少し丹念に調べてみると、佐野次郎左衛門(『籠釣瓶花街醉醒』に出てくる)に殺された八ッ橋の墓、内務省警部補谷豊栄と心中した遊女盛紫(盛絲)の新比翼塚、その他、無理心中の犠牲になった若紫や尾車など、一葉の文学の題材に欠かせないものが境内に溢れている。この浄閑寺を荷風が訪ねる数年前、『にぎりえ』の成立した明治二十八年から逆算して、少なくとも荷風が訪れる四、五年前に一葉が取材していたと推測される。この時に新比翼塚などを一葉は見ている筈である。

写真などに撮らないという条件で、寺の『過去帳』を見せてもらおうと、「〇〇方××・売女・明治△△年△月△△日△才。死因^{ばいどく}毒と生々しい。次からつきに出てくる遊女に〇〇方とあるのは樓の主人の名であろうか。ふるさとならないのである。死因で一番目につくのは毒とか毒兼精神錯乱、毒兼脚気などと、ほとんど正視できないほどの悲惨さである。そして次の行と矢印で結ばれてある男女は心中である。これらの遊女たちがどんな生い立ちをして死んで行っ

たのであろうか。

「生まれては苦界、死して浄閑寺・花又花醉翁の石碑が荷風碑とともに遊女の墓を見守っているばかりだった。

「私の子どもの頃には、朝になるときまって山門の入口に遊女の死体が置かれていました。筵むしろにくるまれた湯文字ゆもじ（腰巻）一枚だけの裸の死体です。手に三文錢（三途の川を渡るための小錢）を持たされただけの姿でしたよ」

と老住職は説明してくれた。死んだ遊女の付けていた着物は、身ぐるみ剥がされて次の遊女がそれを着て客を取ったということだろう。正に荷風のいう「遊廓ほど、悲しくも又怖ろしいものは無い」のである。

先程の『おこんさん』こと、宮ふじ姉さんにもう一度登場してもらおう。勿論、宮ふじ姉さんの場合は時代も一葉の時代とは比べることもできないほどに新しい。まして姉さんはれっきとした芸者であるから遊女の悲惨さとはほど遠い。それでも花柳界を垣間見る手助けにはなるだろうと思うので林えり子著『おこんさん』（三田文学刊）の中から断片的にその雰囲気伝えてもらおう。

「帳場の囲炉裏には、おかみが線香を立てて座っていた。線香一本が燃えつきるのに三十分かかる。それが客によって二十分になったり、銘酩の具合では十分ということもあった。おかみが素知らぬ顔つきでポキッと折るのを、はっはっは度となく見てきた」

「芸者屋に着くたびに、はっは女将に連れられて近くの銭湯へ行くのであった。銭湯が芸者奉公にゆこうとする娘たちの身体検査の場と化していたのも、この世界に生きる女たちの知恵であったろうか。しかし、はっはそのときは十七歳であった。何をされるのかと内心で怯える。洗い場で裸のはっに向って女将は『こっち向いてごらん』『ほら後を向くんだよ』とっつけんどんに命令した」

「花柳界は性の世界である。性はさまざまな工夫が凝らされ、それを三宝に載せて供えるかのような儀式によって売りに出されるため、その本質がぼやかされているが、厳然として性の世界なのである。処女でさえも『水揚げ』という手のこんだ器に盛られ、あらかじめメニューを配られた鬘よたれ筋の、その涎よたれのしたたりを見透すようなあざやかな手口で、

買い手に届けられるのだ」

湯田中温泉の丸茄という遊廓に宮ふじ姉さんは落着いた。

「はつの前借金は八百円であった。玉代の一時間一円五十銭のうち一割がその借金返済にあてられた。丸抱えと言っても食費や生活の諸経費を差し引く楼主もいて、吝嗇家の丸茄がそうしないはずはなかった。座敷着をつくれれば、呉服屋のつけとなって、あるとき払いがゆるされたが、楼主がかたがわりすると、借金に加算されるのであった」

「からからと下駄の音が一本道をひた走る。花魁が二人、三人とあちこちの楼から飛び出して来て、坂の突き当りにある温泉場へ一目散にめがける。一本道にも出られないはつは、紅殻格子の中からのぞいていた。女たちは赤や青の毒々しい色の、セルロイド製の洗い桶を抱えている。雪が降りたての道はすべりやすい。凍てついた夜も足をとられる。それでも駆け出さずにはいられないのであった。泉源の洗い場につくと、彼女たちは白い尻を丸出しにして、石段の上に股がり、湯をさぶさぶこぼして、恥部を洗う。首にかけた手拭いでさっとふくと元来た道を、また小走りで戻ってゆく。彼女の部屋には次の男が待っている」

昭和三十三年の「売春防止法」の実施によって、新吉原や宮ふじ姉さんの居た湯田中温泉など、東京・長野をはじめ全国三万九千軒の娼婦宿が消え、十二万人の女たちが何処かへ散って行ったと、『おこんさん』には記されている。しかしこれはあくまでも表の数字であって、実際にはこの数字を遥にしのぐ女たちが春を販いでいたものと思われる。

『たけくらべ』の「水揚論」が、とんだ大まわりをしたものだ。

おしまいに、一葉の作品にはかなりの「甲州弁」（山梨県地方の方言）が含まれているという実例を紹介する。

樋口一葉の作品は、その文体の美しさや、無駄のないことばの構成と歯切れの良さから、それこそちゃきちゃきの江

戸ツ子の言葉そのものと思っっている向きが多い。私もかつてはその一人であった。これこそ日本語の原点で共通語（昔の標準語）そのもので書かれた代表的な文学作品だと思っっていた。ところが朗読を何回か重ねて行くうちに、「おや」と気付くものがある、一度そう考え出すと随所に甲州弁や、ややそれに近いと思われる言葉に突き当たるのである。それを甲州方言とは知らずに、苦勞をしながらそのまま読み下してしまっっている文献が多い。

たとえば『たけくらべ』を見ても、

（三章） まくわまくわ、同級の女性徒二十人に揃いのごむ鞠を与えしはおろかの事

（六章） お前はいやかえ、いやのような顔だものと恨めるもおかしく

（十章） 人々への気の毒を身一つに背負いたるようの思ひありき

「おろかのこと」「いやのような顔」「背負いたるようの思ひ」など、当然共通語では「おろかなこと」「いやなような顔」「背負いたるような思ひ」となるところを『な』ではなくて『の』と表現する。形容動詞の語尾の『な』が『の』になるのが山梨方言の大きな特色のひとつである。

また

（四章） あれあの飛びようが可笑しいとて見送りし女子どもの笑うも無理ならず

（十章） 秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶ事この通りのみにて七十五輛と数えしも

「あの飛びよう」「車の飛ぶ事」の『飛ぶ』というのは、山梨方言では単に『走る』ことを意味して、本当に飛んで行く場合も『飛ぶ』で区別がない。子どもたちが『駈けっこ』をする時も『飛びっこ』であり、『飛びっこしちやあ』といえは『駈けっこししよう』ということになる。

『たけくらべ』の姉妹編の『にごりえ』から山梨方言をみると、

(一章) 顔を見てさへ逃げ出すのだから仕方がない。どうで諦め物で別口へかかるのだがお前のは夫れとは違ふ

『どうで』は副詞の『いずれにせよ』『どうせ』の意。「どうで一日か二日の命」と尾崎紅葉の『色懺悔』に見えると『大辞苑』(三省堂)にあるが、山梨方言では現代のことばである。さらに、

(六章) 朝之助おどろきて帰り支度するを、お力は何うでも泊らするといふ

『どうでも』も同じ『大辞苑』によれば、「副詞「どう」に副助詞「でも」の付いたもの。①どのようにでも。どうでも。」「——するがいい」「——いい」②どうしても。「——行かねばならない」「此月は——約束の期限なれど／大つごもり一葉」③確かに、やっぱり。「是は——言文一途の事だと思立て／浮雲四迷」とある。『どうしても』という意味での『どうでも』も山梨では現代のことばである。

話は逸れるが、ある葬儀の席に山梨県南東部の秋山村あきやまという山村から来られた年輩のご婦人が、「いとど」ということばを連発されるのには吃驚した。『更級日記』並のいとどゆかしきことばではあった。

ことほど左様に四方山に囲まれた山梨県地方には、室町時代にまで遡れる言葉や、独得のことばが甲州方言としていまも普通に使われている。一つの村の中でさえ微妙な違いがあったりもする。まして明治五年に生まれた一葉が、たとえ東京から一度も山梨の地を踏んだことがないとしても、両親の言葉を色濃く遺していたことは当然だろう。一葉はその短い生涯に十五回も住所を変えたというから、東京で生まれて東京で死んだ一葉は、大都会の中でも常に家族や同郷の人たちを意識しながら生きていた女性だったと察せられる。

荻原留則著『樋口一葉と甲州』から引用させていただくと、それが良く理解できる。

「昭和十八年に樋口家から見つかった香典帳には、多くの甲州出身の人々の名前が記されています。一葉が「親類めき

たるもの」と書き残している人々の名前とも一致しているところをみれば、父則義同様、明治維新の後も本郷付近を中心として、本当の血のつながりがあるかのように助け合いながら生活していた甲州出身の人々が浮き彫りにされてきます。一葉の日記には、それらの人々が足繁く樋口家に入出入りしていた様子が書かれています。同郷のよしみ、故郷の甲州弁が行き交っていたことでしょう」

山国^{やまくに}甲州人の性格として県人意識が極めて強い特長を持っているが、郷里を離れてはますます強く団結する。東京の中の小さな県人グループが、あるいは同郷グループがあつて、そこでは互に慰め合い、情報を交換し合い、思いっきり甲州弁での会話が弾んだに違いない。これらが一葉に言葉の上での影響を大いに与えたことだろう。『たけくらべ』に『ごりえ』の二巻に、気付いたものだけで、これだけ山梨方言があるのは面白い。他の作品はさらに多くの甲州弁を見るのである。

まとめに入ろう。私がここで最も強調したかったのは、『たけくらべ』に『ごりえ』の姉妹編を純文学の目だけで補えようとする、最も重要な部分が見えなくなってしまうということである。この二編を記録文学 documentary literature として補えなおすことによって、表面では解決できなかった作品の奥がみえたのである。そして改めて『たけくらべ』を朗読してみると、これは実に恐ろしい作品である。仲間の子どもたちと無心に遊んでいる美登利にしのび寄る大人の社会の魔の手が、しっかりと少女を押さえ込む。まるで生まれたばかりの蝶を糸にひっかけて襲いかかる鬼蜘蛛の姿である。「女らしい温順^{おとな}しうなつたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹^{そし}るもあり」と、誹ったのは正に一葉その人であつたらうと私は思う。二十三才の作者一葉が、社会の大きな仕組みに抵抗したこれが精一杯の桃戦ではなかつたらうか。

「二十九年四月、『たけくらべ』は圧倒的な評価を受けました。たずねる人がふえ、原稿の注文もふえました。『極みなき大海原に舟出した』のです。ちょうど『たけくらべ』が世の絶賛をあびていたころ、一葉はのどがはれたことに気づきました。肩がやたらにはって、それが固くしこると文鎮^{ぶんちん}でたたいてもひびかないくらいでした」(伊藤栄供『樋口一葉と「たけくらべ」のことなど』(明治図書)の解説)

すさまじい一葉のたたかいです。この自分自身の体の不調が、おそらくは美登利のモデルになったであろう少女の身に、まるでのりうつったような気迫となって現れたのだと思う。表面はあくまでも美しく。読者はその美しさゆえに悲しさを深くするのだ。『たけくらべ』は、あだやおろそかに朗読できない作品の一つである。

★出稿顛末記★

私は朗読家として一葉文学も何本か手掛けてきたが、樋口一葉の作品は多くの学者や研究者によって極め尽されているとばかり思っていた。ところが意外にもその解釈が学問的であり過ぎて「木を見て森を見ず」の例えのように大きなところで穴があいているような気がした。その最たるものが『たけくらべ』における解釈の仕方であった。そこで私は自己流に解釈して講演もし、後輩の指導もしてきた。そしていつか一つにまとめてみるのも必要なことかも知れないと思っていた。そこに『調布日本文化』の話が舞い込んできたので早速この論文となった。

ところが、ところがである。学園の同僚である影山恒男先生から、「先生と同じことをかかって佐多稲子さんが書いていましたよ」というご指摘をけた。その時の私の気持ちは、「そうだろうな。これは誰かが指摘していない筈がない。やっぱりそうだったのか」と、納得半分と、あとの半分は佐多稲子さんに対する尊敬の気持ちが湧いた。早速くだんの原稿を影山先生に探していただいで精読した。それは一九八五年五月一日発行の講談社刊『群像』で、題名も私と同じで、佐多さんは「たけくらべ解釈へのひとつの疑問」と付けられている。考え方の基本においても私と全く同じで「初潮説」に対して「初店説」（吉原では「水揚げ」という代りに「初店」という表言をした）を唱えて長谷川時雨・和田芳恵・瀬戸内晴美さんらの「初潮説」を否定されていた。「それ（初潮説）ですむなら『たけくらべ』の良さは単なる少年少女の成長の記に終ると云えないであろうか」そして「初潮と見るなら、樋口一葉は、そして『たけくらべ』はずっと軽いものになると云えないであろうか」と佐多さんは述べている。その後、これが反響を呼んで同年七月号の前田愛氏の反論。同年九月号の野口富士男氏の論考となって『群像』に都合3回のシリーズとなって取り上げられていた。

識らないということは時として無知に通ずると思うが、私はこれを全く知らなかったのである。そして佐多さんが口

火を切った「初店説」を、大岡昇平・吉行淳之介・澤地久枝さんたちが支持したことも知った。そして更に佐多さん以前の一九五六（昭和31・3）年にも太田一夫氏の論考「美登利憂鬱の原因」（明日香路）で「初店説」が流布されていた（『近代小説研究必携』① 有精堂出版）ことも知った。

こうなると本来、私は降りるのが当然かなと考えた。しかし改めて考えると、私の論考は朗読家であり、ジャーナリストとしての私の経験から出発したもので、足で稼いだ『たけくらべ』論になっている。できる限りの実証に基づく「初店説」で、単に直感だけでまとめたものではない。純文学の世界にドキュメンタリーの見方を据えることで、対象がより明確に現われたと自負している。やがて日本にも上陸してくることになるイプセンの『人形の家』以前に、日本独自の女性解放の柔らかな芽を一葉文学に見る思いがする。この小さな論考が太田一夫・佐多稲子につづく第三の「初店説」になればと願うものである。